
君に出会う冬の季節

IKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に出会う冬の季節

【Nコード】

N8270Y

【作者名】

I K A

【あらすじ】

季節は冬、全ての終わりが近づく——雪の季節。最後の季節に、俺は大切な出会いをする。その出会いは、今までの俺の人生を大きく変え、そして——一つの奇跡を起こさせる。記憶を失い続ける少女と、記憶を失わない少年の出会い。この冬——溶けゆく雪の、溶けない記憶の物語が、始まる。『大切な記憶に、溶けない奇跡を』

ましろ色のプロローグ（前書き）

この小説は前作『君に出会う春の季節』と同様季節シリーズ。

短い雪の恋が今、始まります。

ましろ色のプロローグ

——雪が降っていた——

それはいつ止むかも分からず、ただ深々と降り積もり俺たちを——
——ましろ色に染めてゆく。

気づころには、俺の肩には雪が積もっていた。

白く染まる吐息。

寒い。けれど、足を止めてはいけない。

だって俺は——“約束の場所”——そこへ向かわないとい
けないから。

傘も刺さずに、ただ深々と降り積もる雪の中を走り続ける。

まだ、間に合う筈だ。

まだ、助けられるはずだ。

まだ、奇跡を起こせるはずだ。

まだ、全てが終わった訳ではないのだから――

初めて君に出会った時から、様々な感情が俺の中を駆け巡っていた。

だから、この想いを忘れたくないんだ。

この想いを、無かった事にしたくないんだ。

この――好きと言う気持ちを、忘れたくないから。

『はあ、はあ、はあ、はあ・・・』

そして俺は、ましろ色に染まる道を走り続け、海岸に辿り着く。

季節外れの海は、潮の香りと、強い風が頬に当たる。

そう。この場所が、約束の場所。

俺は更に走り、“君”を探す。

まだ、君が覚えてくれているのなら——必ずここにいるはずだ。

『はあ、はあ、はあ・・・——そう、だよな』

そして俺が見つけたのは、一人の少女。

悲しそうな瞳に、雪のように白い肌。

弱々しいその姿は、今にも崩れてしまいそうだ。

『なんで・・・貴方は・・・』

君は、驚く様にそう言ったね。

『俺は、記憶力が良いんだって・・・言っただよな』

そう言って、徐々に君との距離を近づける。

——— 奇跡を信じて ———

『雪希』
ゆき

俺は、君の名前を呼んだ――

溶けてゆく雪があっても、俺は――溶けない奇跡を信じて――

ましろ色のプロローグ（後書き）

こんな感じのスタートです。

感想など、どしどしください！

名もなき少女との出会い（前書き）

今回の作品の主人公は前作同様の彼ですが、彼の性格やその他が結構変わっています。

まあそのへんは読めば分かりますし、お寿司。

ではどうぞー！！

名もなき少女との出会い

中学3年生、冬。

現在12月。

俺は一人、外に出ないで家でのもくろきにミカンを食べて過ごしていた。

「今年も後30日ちょっとかあ」

そんな事を考えながら、クリスマスとかの予定を考える。

特に彼女もない俺にとって、この冬は夏休みと何ら変わりはない。

ただ今年は中学生最後の冬と言うことで、何か行動を取ろうと考えた。

「・・・あそこに行ってみるか」

俺はそう言って厚着をして冬の外を歩き出す。

「うう・・・寒い・・・」

マフラーと手袋をしても、この冬の寒さはどうにもならない。

そんなことを思いながら俺が来たのは、何とこの季節にもなって海だ。

え？何で海かって？

「特に意味なんてないさ」

あ、すみません。調子に乗りすぎました。

いや、でもほんとに意味なんてないです。

海が家の近くにあるので気分で来た。

「この季節に俺みたいに海にくる奴なんていないよな・・・」

そんな事をボヤきながら、潮風吹き付ける冬の砂浜を歩く。

「・・・ん？」

だが、そこに一人の俺と同年くらいの少女がいた。

茶髪のサイドポニーで、胸も少しある。

青っぽい瞳は、まるで宝石の様だ。

その彼女は一人、海を眺めていた。

俺みたいな変わり者も居るんだなと少し関心しつつ、俺は一人でいる彼女に何となく声をかけてみた。

「ねえ、そこで何してるの？」

すると彼女は俺の方を向いて静かに答える。

「・・・海、見てた」

見れば分かるよ。

「何で、こんな寒い冬に？」

そう言うとな彼女は疑問そうに聞き返す。

「冬に見ちゃ、悪いの？」

「いや、悪いって事は無いけどさ。海って普通は夏じゃないかなって思ったからさ」

そう言うと彼女は納得したように頷いて海を眺めながら俺に言う。

「私は、今が冬だって事・・・知らなかった」

「・・・え？」

意味が分からなかった。

冬だって事を知らない？なんで？日本人の常識じゃないか？

「どういうことだ？」

「そのままの意味。私は、今が冬だったって事を、今知った」

「なんで・・・そんな・・・」

知らないと言うことは、学んでいないか、誰も教えてくれなかったか。

その二つのどれかだと、俺は考えた。

「君は、学校に行ったことはあるか？」

そう聞くと彼女は思い出す仕草をしてから答えた。

「分からない。あるような気がするし、無い様な気がする」

「・・・そうか」

答えが分かった。

学んでなかったんじゃない。

教えてもらえなかったわけでもない。

——その時の記憶を失っているんだ。

つまり彼女は——記憶喪失。

「君、名前は？」

「名前なんてない。あっても、すぐに忘れてしまうから・・・私には、意味がない」

冷たい言葉だった気がした。

悲しい言葉だった気がした。

残酷な言葉だった気がした。

だって、形あるものには全て名前が存在する。

それは、一生背負って生きていくもの。

責任とか、罪とか、そんなものよりも長い時間付き合っていくのが名前だから。

だが彼女は違った。

名前と言う、一生を共に生きるものの存在を『意味のない』と否定したのだから。

・・・俺は、何となくこの海に来た。

その時に出会ってしまったのは、苦しい病を背負った一人の少女。

記憶が無い少女に、俺は何が出来る？

答えは――一つだろう。

「だったら――俺が君に名前をあげるよ」

「え・・・」

そう。君と言う一人の少女の人生を、今からまたはじめさせれば良

い。

その始まりの場所が、この海なんだ。

君に、名前を与え、君に今から新たな人生を生きて欲しいから。

そのきっかけは、君の名前から。

「私の・・・名前を？」

「ああ。全ての始まりは、それからだ」

そう言って俺は辺りを見渡して、君に似合いそうな名前を考える。

「うーん・・・それじゃ・・・」

そして俺は、君に一つの名前をさずけた。

「君の名前は——『雪希^{ゆき}』——」

「雪希・・・」

そう言う君の瞳は、まるで光がさしたように今まで以上に輝きを見せる。

希望を見つけた、その瞳。

「でも、この名前・・・忘れちゃう」

「大丈夫だ。俺が覚えてる、君の名前を俺は一生忘れない。絶対に
な」

そう。もし君自身が忘れようとも、俺が覚えてる。

忘れたときは、また教えればいい。ただ、それだけの話なのだから・

「・・・絶対に、覚えててくださいね」

「もちろん。俺、記憶力には自信があるからさ！」

そう言って、俺は君の手を引く。

「あ・・・」

「そんじゃ、挨拶も終わったことだし、こんな寒い所にいないで、俺ん家に来いよ！」

そう言って俺は、雪希の手を引いて、走り出した。

『雪希』それは、例え雪が溶けてゆくように記憶が無くなるうとも、決して希望を忘れてはいけないと言う意味を込めて名付けた。

名もなき少女との出会い（後書き）

さてさて今回のヒロインは『雪希』です。

このキャラ、『あかね色に染まる坂』に登場します、『長瀬湊』をイメージしてみました。

まあ印象などは一切違いますので、容姿がそれとほぼ同じですと言っただけです。

ですが名前などが一切違うのでTPPに引っかからない上に自由に使えます（キリッ）

消えゆく、記憶と約束を残す物

彼女、雪希と出会って俺は毎日彼女と初めて出会ったあの海で会うようになった。

冬の寒さがありながらも、彼女に会う事は俺にとって一つの日課となっていた。

——『雪希、おはよう!』

必ずその挨拶から始まる。

・・・けれど、

——『・・・誰?』

君は必ず、そう言い返す。

そう、君の記憶はたった一日で全て消えるんだ。

それこそ、雪が熱で溶ける速度よりも速く。

君の記憶は、どんどん消えていく。

覚悟は出来ていた。

君は俺を忘れることは、分かっていて、覚悟していた。

けれど、やっぱり忘れられるのは苦しい。

――『あ、ごめん。初めましてだね。でも、俺は君の事を知ってる、知り合いだよ』

だけど、諦めきれないから、次はそう言っている。

――『・・・ごめんなさい。私、記憶が・・・』

――『知ってるよ。消えてくんだろ？』

――『!？・・・ごめんなさい』

この会話は、毎日変わらない。

まさにD，Cだ。始まりに戻る・・・その通りだ。

君の記憶は、何度も何度も始まりに戻り、また全てを始まりから始めなければならない。

どうすれば良いのか、しばらく考えながら、君に君の名前を何度も渡した。

——『君は、雪希って言うんだ』

そう言って、次の日、またこの海で君と会って同じ事の繰り返しだった。

だが、俺は一つの希望を見つける。

それは、ほんの小さなこと。

だけど、それでも、賭けてみる価値はあった。

だから俺は次の日、彼女あるプレゼントを渡した。

『……これは？』

――『日記帳。ここに、今日あった事の全てを書くんだ』

そう。中学生にもなって日記帳とはどうかと思っていたが、これしか思い浮かばなかった。

――『もし記憶が消えてしまうなら、どこかに残せばいい。日記には、記憶を残す事が出来るんだ』

良い記憶も、悪い記憶も、辛かった記憶も嬉しかった記憶も全て記録出来る。

――『・・・ありがとう』

君は日記を、抱きしめるように持った。

――『・・・今日、病院』

君はそう言い出して、歩きだした。

『病院に行く日』と『海に来る事』はしっかりと覚えているようだ。

――『あ、俺も丁度今日病院なんだ。一緒に行こうぜ』

そんな嘘について、君と共に病院に行く。

俺は、知りたい事がある。

君が何故――記憶を失わなければいけないのか――。

病院につくと俺は彼女の関係者として病院の医務室に入る。

女性の先生は俺を見てから彼女に言う。

——『あなたの彼氏さん？』

——『・・・友達』

君は静かにそう答えた。

友達と言われて、素直に嬉しかった。

——『そう・・・それじゃ検査を始めるわね』

そう言うので俺は医務室から出て、自販機で飲み物を飲んでいた。

どんな結果が出るかなんて分からない。

けれど、最悪な事態にならないことだけ祈っていた。

その後、雪希は病室から出ていき、一人でふらりと去っていった。

俺は彼女と話しをしていた医師と話しをした。

——『彼女は・・・どうして記憶が消えて行くんですか？』

単刀直入にそう聞いた。

何よりも知りたかった、彼女の真実。

——『・・・それは、興味本位で聞いていい話しではありません
ん』

先生はそう言った。

確かに、彼女自身の事を聞くのは、興味本位のレベルで聞くことじゃない。

・・・でも、

——『俺は興味本位で聞こうなんて考えていません』

そう、興味本位で君の真実に触れるつもりはない。

ただ、寂しそうだったんだ。

冬の海をたった一人で見つめている姿は、見ていられなかった。

何も無い、空っぽの少女。

君を見た瞬間、俺の中で色々な何かが変わったんだ。

失われゆくものが目の前にあって、手を伸ばせば救えるかもしれない。

手を伸ばさなかったら、一生後悔するって思った。

だから俺は君に手を伸ばした。

――俺は、彼女の忘れていったものを、全て覚えてあげたい。俺が彼女の記憶になってあげたい。俺にとって雪希は・・・大切な存在だから』

――『・・・彼女に、雪希って名付けたのは・・・あなただったのね』

――『え？』

先生はそう言って、全てを話してくれた。

――『彼女は生まれつき記憶の容量に限界があったの』

――『記憶の容量?』

――『パソコンに入るデータの量が決められている様に、人間にも入る情報の量は決まっている。まあその容量はPCよりも遥かに多いけどね』

そう言って先生は俺を見つめて話し出す。

――『けれど彼女は、その容量が極端に少ないの。だから脳は超えた分の記憶を削除して行ってるの』

――『・・・』

俺はもはや驚きもしないで絶句した。

それだけ俺は、君の真実にショックを受けたんだ。

君の真実は、やっぱり重い。

――『それで、その容量って何年分の記憶に相当するんですか?』

――『現在の彼女の年齢は15歳。そして覚えているのは――
――13歳まで』

二年分・・・730日分の記憶が容量オーバーで消えていっている。

――『彼女の脳は、崩壊させないために覚えた事を睡眠と言う時間の中で消去していつてるの』

じゃ、覚えてもいらないと扱われて消去されていく……のか。

――『……けど、最近彼女はある事を必ず覚えているの』

――『え……』

――『……『雪希』って単語。きっと名前なのだろうけど、これは彼女の本当の名前じゃないわ。なのに彼女は雪希と言う単語を覚えて……忘れなかった』

雪希……か。

――『どうしてなんですか？』

――『これは私の予想だけれど、彼女自身の覚えている記憶と言うデータの中で不必要な記憶を削除して、現在の中でもっとも必要な記憶を保存させたんじゃないかと思うわ』

それだけ、雪希と言う名前は大切なのか……

――『彼女の話はここまで。その他の記憶は、彼女……雪希さんから聞いて』

――『はい。ありがとうございました』

――『いいえ。あなたは、彼女を救ってあげられる。だから、いつでも助けてあげる』

——『・・・はい』

そう言って俺は、家に帰った。

雪希 Side

——『・・・』

私は一人、部屋で彼から貰った日記を見つめていた。

ここに書けば、忘れても・・・残る。

私と言う存在を・・・残せる。

——『タイトルは何にしよう？』

そう思いながら、ペンを持つ。

そして私は、何となく思いついたタイトルを書いた。

『雪希としての記憶』

私が雪希と言う名前になった事から始まる。

この日記は、雪希と言う名前の私が書くから、私の日記。

そして私は1頁目にこう書いた。

——初日。

私は、私の記憶を残して、覚えてくれる人ができました。

そしてその人は、私に名前をくれました。

この日記に、私は約束と記憶を書きます。

これで——忘れないはずだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8270y/>

君に出会う冬の季節

2011年11月27日13時49分発行